義仲勲功圖會

三

遠
2598
10-4

明遠
號2508
10-4

義仲勲功図會前編巻之四

目録

教盛見姙夢 并重盛逝去
重盛叉の入道が奢移を練る図
安徳帝御即位
高倉宮御謀叛 并廻宣之事
仲綱宗盛が不礼を憤る図
藏人行家傳令旨義仲
木曽間者経進宇治合戦

高倉宮之若宮赴六波羅　同図

高倉宮之西宮北國下向

讃岐前司若宮然将〻山門へ登図

大夫房覚明禹木曽

覚明討判官無任図

緒國源氏蜂起

権頭兼遠上京

帝國圖書館藏

木曽義仲勲功圖會卷之四

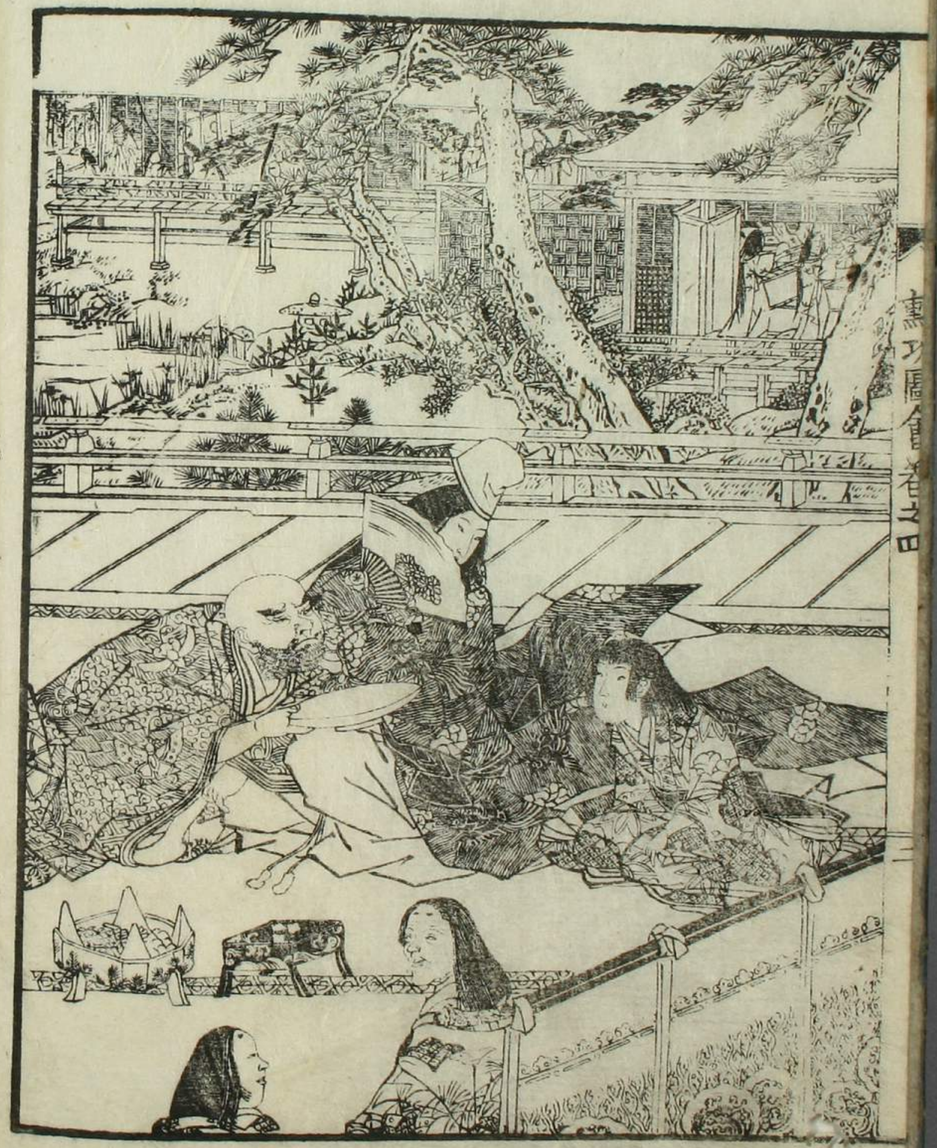
浪速　山珪士信考訂

教盛見奇夢并重盛逝去條

帝城ハ大政入道清盛奢侵驕慢日々ニ増長〻〻主上々皇を蔑如し〻萬機の政を専擅ニせ〻ハ其射さ〻ハ古の清盛なりと何さゝ天魔の入道が身ニ入るとゝ多き中〻心ある徒ハ首を疾しち頭を慙く謝を合々るゞ茲ニ和りハ合ところすゝを古々り入道の舎弟門股中納言教盛一夜の夢ニ見れ〻ハ保元平治両度の合戦ニ討ま〻ハ六條判官為義子息義朝太夫進朝長悪源太義平陸奥六郎義隆十馬助忠政又子をもつの數百の者〻ハ各顔色夜叉の〻〻或ハ天狗の如あく。讃岐院を張輿ニ奉り木幡山の峠ニ早居て都へ供奉し進せ〻高議を教盛夢心ニ奇異の思ひをな〻新院の御姿を畏る〻凡なるニ御髪ハ空さゝ小立さゝ龍眼の光星のごく〻大鳥の〻〻嘴長く尖り手足の御爪長く〻伸〻るゞ金龍の御衣を穿ち金冠を頂ハ玉〻ゝ身の堅く恐ろ〻ハ

ホ忠政為義ハ音ホヤ多ハ君を西國ヘ遣さと是まく供奉ーなりぬ北上ー
何まろ所へ供奉ーなるべそやーつホ。左馬頭義朝声ホ憑ど。只法皇の御所
法住寺殿へ入なるなやしやホ。義平進を出。此義ハるひゆちど。其故ハ院の御所ホ
ハ頃日天台座主御修法中ホ。不動大威德ちどの四天王門々を守護ーみへハ
濃く入なるるーホ。不如大政入道が亭へ入まーんホハとヤホど。諸將是ホ門どもや
入進ーせよーく朝長ハ前輿。義平ハ後輿を仕て皐上きど。諸將勇ミ立前後を
囲遶ーく清盛の宿所西八条へ入なるホど。教盛仰天ーく呼ー叫び倒るーとり
ど目覚ぐ是一場の夢なり多れど女ーハ胸を安ー多れども全身ろ汗ハ衣服を浸
ー動気なく不止。教盛深く怪ミ人ホを語るどーくも心中ホ危ぶミ思れ多る
ホ。果ーく入道ぶ放逸邪見日来ホ十倍ー。殺戮をのく好ミ仁慈の沙汰ミ女ーも
なろ多れバホ松内府重盛大ろホ歎ち古へ今ろ例を引ちろく忠練ー多れども元
來悪霊ろ心ホ入替りーる入道ろれど邪も用ゆるなく却重盛を忌疎ど

ろ其頃歩音院入道師長ハ内大臣左大將ホ。ーなるろ。思ロ音ありて大將
を辞ートされれど新大納言成親卿率ひろ事ホ。ひ我ミて大將を十清
ろと法皇ホ就ーく種ホ望ーされ多ホより。法皇も既ホ御許容の色なりなると。
大政入道清盛ぶ成ーくるホ。嫡子重盛ぶ右大將なりなる成左大將ーー男宗
盛を右大將ホなーくるホ。成親大ろホ望を失ひく深く平家の我意を憎ミ。
天晴平家を亡ーく此恐を雪へ。おろかなるれ義を扶ひ内ミ一味ミ相
語ホ。平判官安頼近江中將蓮海法性寺ろ執行俊寛僧都西光法師など
其外北面ろ輩是彼多ーく門意せーぶるべ武士多ーて八如何ーく摂津源氏の
内多田藏人行綱八俊寛僧都と師擅ろ交ミあれど是を相語ーく大將軍ー頼
ミ。鹿ろ谷ホて會合ー密謀をホー合せるホ。頼切ーる藏人行綱忽ち変心
ー福原ろ別業へ独下ミ。入道清盛ホ渇ーく。成親卿ろ謀叛ろ趣遂ーホ注進
ーるるホより。入道大ホ怒ミ。即時ホ京師へ独上りぬ。成親卿をーるる謀叛ろ輩



小松内府
又入道が
放逸
奢侈を
諫る図

を悉く召捕へ已下斬罪とへ罵ることを門府重盛種々諫るゝより成親ハ
我と備前ノ小嶋へ流罪し子息丹波少将平判官康頼俊寛僧都三人薩
摩国鬼界嶋へ流し其外或ハ死罪或ハ流罪ゝ所ゝ清盛勅怒尚もやまず
法皇ハ押籠まゐらせ給ふ又小松殿種々ゝ諫言有れど漸ゝ其義
ハ止ゝ公卿ゝ殿下家孫亡び免れ前表ゝ棟梁の賢臣と仰れ小松内大
臣重盛治承三年六月の頃より所労ゝ重し遂ゝ日八月朔日遷齢四十三才
あく逝去せられ清盛の暴悪も此人の仁徳ゝ覆ひ諸人平家を背き
離散ゝ今忽ちゝ幽冥の客となるゝ法皇主上も是ハゝ成行
世の中ゝやと惑ハせ給ふ平家の人々を盲人の杖を失ひ暗夜ゝ燈
を消るゝ心地し伏流ゝ泣叫と大方なりぬ入道ハさのゝ悲嘆の色を
なく却て日の上の痛れる心地し重盛死せる上ゝ萬事心の儘ゝ挙動ん
とするハ偏ゝ天ゝの所為とぞ思れる

安徳帝御即位條

小松殿逝去の後ハ洛中の上下何となく騒ゝ人心穏ならざるゝ九月七日
大風俄ゝ吹起り一天須臾ゝ掻曇り只暗夜のごとくなり名れど貴賤老若大
ゝ恐ぐ処ゝ洛東の将軍塚鳴ゝ鳴動ること一時の中ゝ三ゝ度也
就中弟三度目の鳴動八日本国中へ聞へる昔より此塚動鳴ること四ゝ
兵革起るゝ前ゝ何ぞ大乱の起る兆ゝやと人々畏惑へ処ゝ十
月七日戌刻ゝ洛中又大地震ること二度ゝ是ゝ為ゝ堂社も柱ゝ折れ軒
傾き端々の商家民屋傾覆ること数ゝ今や大地裂ゝ世界金輪際へ
沈没ること疑ゝ老若男女號泣ること一時ゝ禁
廷ゝも歩ゝ續ゝ天変ゝ恐ぐ思召され八日陰陽寮安部泰親を召ゝ考
しめ給へ泰親ト亀を焼筮竹を振ゝ考へ大ゝ恐ぐ占文の表大凶兆ゝ近
々ゝ卿相の御身の上ゝ大事起り法皇も御慎ゝ不ずゝ奏ること君も臣

も殊更ふ[illegible]畏き緒山の碩徳ふ勅して災害消滅の御祈禱を修せ
りもて[illegible]れども其験なく大政入道清盛福原より馳上りて卿相四十二人の官
職を止て押籠剰へ関白太政大臣基房公の官位を削て太宰権帥に
移し筑紫へ流しまゐらせ是を[illegible]く希代の暴悪なると上下惑ひのぶる事
所ふ八道に法皇を鳥羽殿ふ押籠進らせ厳しく番卒を付て出入人々を
禁じ改させられ院ハ只配所の罪囚のごとく御傍ふ仕へまゐる者とて八右衛門佐
とやなる女房の尼ふなりてまゐる朝夕の供御献るのみなれど明暮ふ御衣の袖を
御涙ふしをりてせもへ是こもみの纐岐院清盛の心ふ入替りて打ゆせもへどもれ
なるふ斯て其年も暮翌治承四年二月ふ入道清盛ぐしまゐらせ当今高倉
院何の御過もましまさるふ推て御位を下しまゐる我女の建礼門院の腹ふ
降誕ましまして多皇子僅ふ三才ふてまします残帝位ふ即まゐる是ハ安徳天皇
とやせり滅ふ大政入道が暴逆ハ漢王莽唐の録山ふも遥ふまさる天憎を地怒る

夫驕ふ者を必ず滅ひ盛なる者ハ必ず衰へなんぬ清盛豈ふ安穏ふ在ることを
得んや人々潜ふ耳語あり世の動静ハ如何を窺ひ[illegible]ふ

高倉宮御謀叛兵廻宣之條

其頃一院第二の皇子以仁王とやまゐらせし御母春宮太夫公実卿の息男加賀大
納言季成卿の御女なり三條高倉宮ふ御座なれば世の人高倉宮とぞやまゐら
せふ永萬元年十二月十六日ふ御年十五ふて大宮の御所ふ入て御元服有
今治承四年ふハ既ふ三十歳ふなりませ玉へども親王の宣旨ハ蒙ることなし世
ふ沈ませ御座まゐる北宮御手跡もめでたく御才智も勝玉へば天晴御位ふ即せ
玉ひ末代の賢王とやまゐらせ[illegible]なれども大政入道朝権を掌握して公
勢を擅ふして已ぞ門とりて罪あるも罰せず功なれども賞ずして官位所領心の欲
もまゐる侭ふ子行へども北宮の御事なれば不捨られて宮ハ只歩籠御
座て春ハ花の下ふ傾く日影を歎玉ひ秋ハ月の前ふ明行空を恨て雨ふ袂を沾

し季にあたりひを包て。世を憂るものにあらずし弱らせ玉ひたるに。入道が悪逆次第に超過して。一院を押篭まゐらせ。今上の御位を下し。関白殿左遷し。卿相の官を削りなどしたるを見まいらせ玉ふにも御憤浅からず。斯程の逆臣を天下の武士誅戮せんともせざる徒に他に見たる八日月も地に堕王法衰滅の時にやと。或は怒り或は悲しみ玉ひ朝夕二度の供御さへ召上られず。只管御物おもひに沈ませ玉ひける
然るに源三位入道頼政は。文武二道に跡らず。殊には歌道の達者にて風流の武士なれば。此宮へも親しく参り二なき和歌の御友なりけるが。頃しも卯月九日例のごとく伺候したるに。宮は心に思召ておはしましける事。殊に御物さしく雅子土器御肴調ぜさせらる。頼政と只二人御歌物語を始として古今の世のさま轉変るならひを語合玉ひ。夜に入も成れば局女房達を遠ざけおひそかに仰らるは。御身はかねて親しき和歌の友なれば。心におもひけるなれ。然ども今のうきたるん勢を人おそれて。かくも胸をひらきて仰出されたるは掛

太政入道保元平治の軍功によりて。官位昇進し大國数多下しおかれしより。何しか心驕り己が親属とさへ何の功もあらざる官階を進め他人にさせる罪なきものひがごとの官職削り職を止め。剰へ御過もましまさぬ今上の御位をもうばひまゐらせ。己が孫の皇子を帝位に進め。外叔の威を逞うし。故あるに法皇を押篭まゐらせ。一の人を擅に解官配流せらるるなんど。古も今も斯程の逆臣はあらざるに。傳きく王莽董卓といへども是程に有べしや。凡不肖なりといへども天照御神より四十八代の神孫として齢ひ三十に充といへども。今に親王の宣旨をも免されず。是皆太政入道権政を専にせられたるなり。されども丸が身を偲なれば是を怨しとは思はずながら。又法皇賊臣の為に困められ給ひて安閑として余所に見るに忍びんや。堯は衰老の母を尊び舜は頑なる父を敬ひしとぞ憐み御身丸を扶けて義兵を起し。平家の一門を亡して院の御憤を晴し丸の御歎を慰めまゐらせば。譬は此身卑の場に骸を晒すも恨みなしと世子ならじと曰ひ

く御涙をながくと流し玉ふ三位入道も宮の御心中を推量まゐらせ落涙して
在るが。稍搔きなをしたまへる。実宣らるべく。太政入道の暴悪さへ人間の
所業ゐ侍らざるを。偏に悪人外道の入道ゐ心ゐ入りたまへること疑れい是とやも
源氏の族八保元平治の乱ゐ亡び失ぬ平家一統の朝家を守護し奉る有
るも傍ゐ責忍を武臣ゐ於ゐ自然我代の増長をゆゆしく侍る斯や
頼政八平治の乱ゐ朝敵の名を憚る。門の好を放き君の行宮へ弛まらず忠と
変しいふより。清盛ゐも見省され独都ゐいでゐ。彼一門の輩ゐ光下ゐ於りい落
され朽ゐたるものゐ重ねたる。君も知召さるべく。頃日右大臣宗盛悪息仲綱が
秘蔵の馬木下鹿毛を強く乞望いへり。馬八武士の大事の用ゐ當て乞者の
いへり。仲綱深く惜み種々辞ゐ。猶天逆ゐ所望せられゆゆ。某愚息を宥免免
角しく右の馬を大臣殿へ進ぜしむ。遅滞せら曲事とて。馬の額の仲
綱の二字を焼印しく追反されい。仲綱ゐいまだ恥を逢いで。大臣家へ入り軽

死せらるべく怒憤をいひ成。某種々諫めこしらへ押鎮めひ是八私の意趣を
もつて兵革を動しいを君ゐ對しまつり不忠を憚ゐ成りされも君の思召を
を是と異なり法皇の御憂若を救ひむ為ゐ兵を起しく逆臣を伐ゐ
八郎ち孝なり驕る平家を亡しく萬民の苛政をゆゆしく是仁なり奈何
を是を御僻るとやへ乞真実ゐ此大事を思立むとかくを頼政一家の微
力ゐ八叶ひいまし蚤々ゐ緒國ゐ潜む源氏の武士ゐ令旨を賜り招ゐ
なりを不日ゐ弛上をいへ。其時某も年拔群ゐ義へいへも老のみりい出一方の
軍将を蒙り老命を忠戦の為ゐ抛ゐ。さも深くやるまを宮斜なりす
御悦喜やし。滅八御身の心をもりゐて是迫心の中ゐのを歎乞暮せゐ頼の
領諾あらを是天照太神の御加護ゐを扶令旨を廻らを緒國の源氏を維々
ゐやと向ゐ頼政入道頭を傾け指を屈く等を中ゐ八先都ゐ八出羽判官光
信ゐ男伊賀守光基出羽藏人光重六條判官為義ゐ末子新宮十郎義盛是八

宗盛仲綱が乗馬
木下蔭乃額ゐ
焼印〳〵追返
兵革の節を
生ずる図

勧刀図會巻之四

熊野ノ住人ホルベシ所部都ホ上リ居ル其他摂津ホハ多田蔵人行綱ハ次郎
知実ハ三郎高頼河内ホハ石川判官代定義又子大和ホハ宇野太郎有治ハ
次郎清治ハ三郎義治ハ四郎業治近江ホハ山本冠者義清柏木判官代
義安錦織冠者義弘美濃尾張ノ間ホハ山田二郎重弘河辺太郎重直ハ名
三郎重房泉三郎重満浦野四郎重遠平敦三郎重頼其子太郎重助ハ
三郎重隆木田三郎重長園田判官代重國八嶋先生齊助ハ次郎晴清甲
斐ホハ逸見冠者義清ハ太郎清光武田太郎信義舎弟加々美四郎遠
光安田三郎義負一條次郎忠頼ハ舎弟板垣三郎兼信武田兵衛右義舎
弟伊沢五郎信光小笠原小次郎長清信濃ホハ岡田冠者親義ハ太郎重義
平賀冠者盛義ハ太郎義信帯刀先生義賢ノ子ホ木曽冠者義仲伊豆國ホ
ハ左馬頭義朝ノ子前兵衛佐頼朝常陸ホハ信太三郎義憲佐竹冠者昌義
ハ子息太郎忠義次郎義宗四郎義高五郎義季陸奥國ホハ義朝ノ末子ホ

源九郎義経其外淀ノ黨ヲ枝葉トスル輩ハ皆六孫王経基ノ末
裔新發満仲ノ後胤頼義ノ家ノ嫡孫ホ昔ハ朝家ヲ保護シ平氏ト
肩ヲナラベシ時ノ保元平治ノ乱ノ後ハ在ルモ無クシテ扁土遠境ノ塵ト埋
レヌ時ノ至ル我待ル所ハ君是ホノ輩ホ今旨ヲ賜ラバ蟄竜躍リ出ル
ベシ不日ホ弛上ル一挙ホ平家ヲ亡シ給ヘ何ノ難カラン
述ルゴトクニ宮御機嫌麗シ御心中ホ思召ハ昔日女納言惟長卿ノ捌人
丸ヲ捌ク君ハ十善萬乗ノ位ヲ踐ミ玉ヒ捌ハ一人ノ天下ノ政ヲ
捨ル人ベシトヤ彼ハ人捌女納言ト異名ニ中ノ一点モ違ハヌトトリ
ヒ彼ヲ引ク是ヲ知リテ今源三位入道ノ頼政ハ中ノ九ノ帝業ヲ嗣キ
時熟シ伊勢内外ノ太神ノ志ノ我ニ在ルヲ思召即時ホ今旨遊ー
ラル就中兵衛佐頼朝ト木曽冠者義仲ハ別ノ今旨ヲ賜ハル其文ホ曰
下ニ北國源氏並官兵等所

○

焦早任面宜狀且木曾冠者源義仲為大將軍令奈洛事

右　宣旨意趣者我為百王孫蚤期宝祚猶依聖運遲々未至即位而清盛入道以一旦冥怪令治天下誇非多權威欲絶皇法之所依有仏神之守護不遂梟敵之奸望未及王法失亡之條明矣謹仰嚴旨可責清盛也速致同心勵微力杲其意趣必進帝位者朝恩爭可空哉然者依清盛武勢下知既致都洛空役我与皇恩以東北武勢何不治天下哉旁各可仰景迹也若於背宣命者早可致伐責狀如件以宣

治承四年四月九日　　前右少史弘槻宿祢

と仰ある。三位入道首を頃け〻稍ありて申さるゝは。大事の御使筆用の人々は叶ふまじ〻幸ひに新宮十郎義盛在京し候へば。彼を賜はるべ

行くるゝ。馬は疾走り〻河辺の塘を霞の〻〻弛行く。茫る〻春の向より年齢十三才紆の乙女物あり〻ひ出さるゝと見え。手ごろの盥に湯を布を入高足跌〻来るを〻前面より馬の鼻嵐吹立くるを些も動ぜざる色なく〻身をかゝりて馬の後に〻る口綱を足跌〻なぐ〻もと踏む。是は如何さも猛く狂へる馬僅なる乙女が足に踐止られて一すも走らず鮮はだ高く嘶く狂ひ回る。女は片手に盥をとり〻頭に頂き。片手に馬の轡ばを把り曳鎮めり。其うちに中間小者追々弛着て女が怪力を驚歎し。馬を結ひ曳かりぬ。義仲は眼前是を見て大いに感ぜられ世にもゝる勇力ある女も有るものかな。和漢女勇を挙るは是中にも。彼荀崧が杜曾が為に囲まれ城中餓死し防戦叶はざる見えける時。荀崧が小女年十三なる。士卒を率ひ城外へ突出し。数千の敵を斬拔周紡とゝる者に救の兵を結遂に敵軍を撃散し城を全くせ

より華陽志に載せられたる古今未曾有のすぶれひしに豈ちうんや我
國にも此勇婦あらんとぞ。雖人の女ぞ尋ねよとて。土人に乙女が又母の
舎を問へども。彼が又をりと小録をも知行せし武士なりが朋友の論言
によりて浪牢し。今は當村にきこり。僅の田畑をかりとめ。耕作の業に世
を送りぬ。又が名を安太夫といひ女を巴と称居宅は云の所なりと委く教
示しぬるにより。義仲悦び兼平に俱に安太夫が宿所へ尋行たるに最
も妨嫌荳葺の軒端のたのぶ生乱き。斜に立る柱ざに細き烟の透窓張し
反古も破ぢに離れ紙も草深く荒しぬる庵の内に。六十に近き老人の身に
も茶染の古絮衣をまとひ。何ぞあらん書籍を續居たり。彼巴は濯し布を背せ
門の方に乾けるにさえかくれぬ。義仲庵に立入て案内しまして。安太夫紙しげ
なる面色にて續居たる書をうちに差おき問鏡とりて立出。是は何國の御
方にて何の為御入来にて。向義仲一揖しまして。其は信列木曾の者にて押

が賢女にて。おとしぬも。面は慎の色をたしなめ。道宮に向ひやるるに。大義の面
宣の御使。無官にて其恐なるに。二つに緒國の源氏に思ふ所も如何
にぞ。宜義盛に官位を下しむるにと。挑奏にて。宮に扶かしめ。當坐
に藏人になされ義盛を改て行家と名称ぶ。十郎大に悦ひて息を謝し。猶
是彼蜜談の上。今旨回文を頂戴し。御暇むりて私宅へ帰り。先消息を認め
古卿新宮へ遣しぬる。其文意は平家暴悪増長して。法皇を鳥羽殿へ押籠め
ぬるにより。平家の一族を殊代とべたり。高倉宮の今旨の御使を奉りは
姓の源氏年来の家人を催促の為に關東及び北國へ下るなり。其表にも家人に
に相觸内々軍戦の用意をなし。行家が上洛を相待べしと。懇めなり。扨其身
も兜巾篠掛柿の衣なんど成身に穿ち。金剛杖つきて。人目には熊野山伏の羽
黒詣もする体に紛装。治承四年四月十日の朝ぞ出て。東國勧を志して啓行
し。先近江中には山本拍木錦織に觸ぬして。丈より美濃尾張へ越。山田川辺

泉浦野葦敷岡田八島乃徒ふ觸廻り。又其より信濃路ふらゝ。岡田平賀ふ今
旨を示し。續て木曽冠者義仲乃姓名を通じ。案内を乞れば。
義仲頓て行家を客舎へ請し。對面ある。行家を。義仲のうハ頼政ふ安ども。
山深き扁鄙ふ人と成られて。定て むつけある田舎武士ふこそとおもひ慢せしふ。身の
丈高く。白面俊眉。言語動止堂々られバ初て驚歎し。色を正しやゝ行家ハ其北
度うゝ姿ふ絡裝。諸國を回る。高倉宮乃御頼ふより。平家追討の令旨を觸
示んが爲なり。別て和殿ハ源三位頼政執達せるふより。別帝乃令旨を賜
ハる処なれば。敬て頂戴しいへとゝふ。義仲大ふ悦び。即時ふ沐浴齊戒して
衣紋を改め。敬て令旨を頂戴ある。其式作法古実を守り。身乃動止優
美なれば。行家倍感歎し。和殿ハ我舎兄義賢乃二男ゆえ。某とは親しき叔
姪乃間なれども。平家ふ世を狹められ。熊野と木曽と山川數百里を隔て
蟄居なれハ。是はゝ對面なるを得ず。如何なる鄙人ふ成れども。尚所へ

きこゝる迫ふ覚束なくふ思ひ。ふ人品骨柄とり行儀作法ゆゑ。都鄙ふ比迫
ふ成長し。嬉しさよ。天晴諸國乃源氏ふ先立一番ふ都へ攻上り。強暴乃平家
を追討し。奇世乃功を立られいへと。扇き立て云られば。義仲完示とふ笑身
不肖なれども。國節を窺ひ義兵を起し。君王乃震襟を安んじ家名を再
興せ。其ふ時ふ一味乃武士を相絡。合戦乃用意あるべき旨ふ。
ども。悪人ゆゑ天子を孫ふ。ふりつ程乃清盛入道を私乃意統ふ。之伐
く。天晴親王家乃宮方乃令旨を得て。北陸道ふ旌を上んとおもひしふ。
望既ふ達し。今北厳命を得る上ハ不日ふ思立ん。但し伊豆乃頼朝とゝふ
く示し合せる義いへ。彼所乃使宜を守合せ。東國北國同時ふ旌を花れい乙
歩て平家両方ふ敵を結途を失ひ。其機ふ乘じ攻上て一挙ふ
く天下を定んと。何乃難れ。手ふ取るゝ如ふ。之で行家ふ勇
立行未乃謀を示し合せ。本曽ふ一日滞留し。是より東國筋乃源氏ふ比

り小島乃頼朝に令旨を傳んと。義仲に別を告再度旅行にぞ赴ける

木曾間者注進宇治合戦條

去程に冠者義仲ハ不意高倉宮より別紙乃令旨を賜りしかバ今ハ何をか期すべき速に勢揃し。先近隣乃輩を攻靡勢ひ益くして都へ攻上らんと勇く立諸士を集へて評議ある所に権頭兼遠席を進み出て大いに制して曰。君令旨を得たまへりといへども未だ味方の人心定まらざれバ隣國乃源氏の動静も揣りがたし。先々事を隠密にし世のなり行さまを見定め。其上にて事を発したまへ。今諸國に源氏乃氏族是彼有といへども皆小身微力にしてあまりも都へ攻上る程乃度量ある人なし。只伊豆乃流人前兵衛佐殿ハ蓋世の英才にして大将軍乃器を備へたまへども生得狐疑深き人なれバよし令旨を得て義兵を起すとも。關八州乃人心を見定めぬ内ハ都へ攻上り玉ふべからず。将頭殿乃八男九郎御曹子ハ孔明張良が智を貯へ樊噲周勃が勇を兼し俊傑なれども。随従の郎等も多からざれバ遠く奥州に潜て。御館秀衡に身を寄玉へバ火急に上洛あらんやうもはかりがたし。されバ都城へ先登せん者君乃外にはあるまじ。されども軽忽に事を遂んとし玉ハバ労して功なきのみならず。御身に災害及びもやせんと申にぞ。木曾どの実もとて出陣を止まり。物覗ある者を間者として都へ上し。平家乃動静を窺はしめ内々兵粮武具を貯へ諸卒を調練して。専ら軍戦乃用意し玉ひけるに其年六月三日に。京都へ上りし所の間者両三人馳皈り。義仲に謁していふやうハ。其ゟ都に上り。商客となりて茲彼処に徘徊し。平家の動静を窺ひし処。五月十四日乃夜俄に六波羅乃下知として。検非違使源太夫判官兼綱出羽判官光長に軍勢を授け。高倉宮へ押寄しめし其趣只事ならざれバ捕へんとせしも何故ぞと探りしに。宮兼て諸國乃源氏へ令旨を下されし事露顕におよびし。清盛入道の怒強く宮を擒にして土佐の畑へ流しまゐらんとの結構乃よしや者乃ハ由へ探ハ一大事なりと。其ホ諸卒に紛れ御所へ入込隙あらバ救ひまゐらせ

御供仕へんと仰ひいふ。宮方ふも早く共吏を守ゑひ〜と捆乃く宮をくるゐ御所
乃男女一人もなく拔落〜。長谷部長兵衛尉信連一人踏留り。多勢を引受憤激
突戰秘術を奮ひ尚乃敵十七八騎斬さく落〜手負の者ハ敷ちゐど。其後信連
も太刀ち折太手を廣けく入礫を于溢廻りいひ〜ふ過ゐ金式と申者の長刀ふ系
く足を損じ。遂ふ生捕まひ。某ふも入乃異〜ゐざる間ふ御所を紛き出猶街乃
風説を守ひふ。元来宮御謀叛乃一件平家へ泄〜ハ。令旨乃御使藏人行家の
より吏起きりと云觸〜ハ。其故を委〜く探り守ひふ行家殿令旨乃御使と
〜く都發足乃砌内々古卿熊野新宮へ消息を遣〜やされゐる。清盛悪逆増
長〜〜法皇を押籠。主上乃御位を下〜ちりぬ。是ふ依く第二乃皇子高倉の
宮。平家を追討乃為諸國乃源氏へ令旨を賜ゐる。其御使を行家奉ゐくハ今
北國東國へ下向ちゐれど不日ふ諸國乃源軍都へ攻上る歟れむ。其地ふおいくも
内々家録卿黨ふ此旨を示〜。合戰乃用意ゐ〜て。行家ゐ旧を捆待ひ〜と申下

されし〜の吏さゐふ依く耶智新宮乃者ども。寄合〜軍議〜ゐるを。平家乃術
乃師大江法眼少付。即時ふ大衆三千人を驅集。新宮乃渚へ兵船を進め〜ゐど
新宮方ふも二千余騎ゆく向ひ合せ合戰一日一夜ふ及び。遂ふ大江方敗績〜く引
退さぬ。ゐふ大江法眼ゐ甥ふ和泉國乃住人佐野法橋と申者。福原乃清盛
ゐ許へ羽撥を赴〜。遂ふ注進〜ゐふより。道大いふ和ごろ紀急ふ都へ上り宮を
虜ふせんとせ〜ゐふ。されども頼政ゐ宮の御味方なるよ〜ハ。平家いまゐ〜ちゐど。
相ゐ〜ん。三位入道殿の二男判官兼綱を征兵乃大將ゐ〜く差向ふより。兼綱ゐの
より又三位入道殿へ注進あるゐ。早くも宮方落延ひ〜と守ひふ。諸ゐ〜れゐ義
仲ゐ〜ゐ兼遠以下以乃外ふ和ごろ紀。木曾ゐの席をゐ〜く手ゐひ。呼ゐ不覚
なる伯叔行家乃行迹ゐふ。ゐ〜も大切なる御使ふ擇ばれながら。猥ふ古卿ゐ機密
を泄〜。宮乃御身ふ禍を招ぶ〜ゐ薄情さよ。扨其後宮ふハ如何ゐなりぬひ〜
ど。問ゐふ。間者答〜やゐく。其後宮乃安否を探ゐ守ひふ。宮ハ征手乃向ふと

や食ひ物もとりあへず其夜三井寺へ落させ給ひ寺法師を頼み〻御坐
あるお処翌日三位入道父子も御跡をしたひ〻馳まゐれ南都東大寺興福
寺の衆徒おび山門の大衆を掴語ふ各領掌し〻蝶状を取合し宮の御
方をなと処平家方より間諜をいれ賄賂を贈り山門の衆徒を省し〻山法師ハ
賄賂ハ眼れ〻忽ち宮方一味の約を変じ平家へ心を寄るより平家ハ時を
回〻ず三井寺を攻伐んと軍勢を催促す宮方ハ頼切なるお山門違変の上諸
國の源氏いまだ二騎も馳参らざれハ三井寺中く敵を引請んも叶ずと宮を
守護し〻大関通りハ関寺関山を越ハ逢坂井坂神無杜を経醍醐より木
幡の里をつゝい宇治へ出るべし其間僅三里ば程ゆく宮六度まく御落馬も
し〻なれハ丈時平等院ハ入まゐり御衣抱ゆる処ハ早くも平家の征将左兵衛督
知盛藏人重衡中宮亮通盛薩摩守忠度左馬頭行盛なんど二萬余騎わく
押寄川の東ハ陣をとる宮方ハ此躰をみて宇治橋の中の間三間ばかり引放

し備へ定め未明より矢軍をはじむ中ゆも寺法師の内筒井浄妙明春〻や僧
尺ゆもたゝぬ橋折を走り廻り敵を射ること十七騎手負を數ること数知ず其後矢種も
尽し〻なれ長刀追ふ走廻り〻敵を切ること又廿四人其太刀ハ早業ハ辟易し〻近
付者ゆなれハ明春ゆ〻ゆ〻停足し息を吐よ〻ひ〻ハ又一来法師と名称く
馳出さ〻ゆハ狭き橋折ハ大の法師の足ゆ兎刎ハ冴〻刎起敵を斬て
草を薙ぐ〻ゆ〻眸く間ハ十七騎切〻落し猶も手痛く働れいひ〻ハ平家を大
勢といへゆも二人の法師ハ寄り来られ川へ追込れ溺死もする者數ゆ〻ゆ宮方ハ
明春一来を射せゆと田満院慶秀矢切の但馬をゆ〻ゆ名を〻ゆ悪僧入〻〻敵
恐れいひ〻程ハ平軍ハ殆ん〻あ〻ゆ川を無双の急流ゆ〻馬の足を入乙ゆ〻ゆ。
橋の上ハ敵強れでゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ処ハ下野國住人ハ俵藤太秀卿の後裔足利
又太郎忠綱と名称其勢凡三百余騎橋より三段ばかり上より川へ歩入〻渡
いハより平軍是ハ屬されく千騎二千騎歩連〻遂ハ悉く川を〻〻勢

ふ手ごゝく突進まゐりしに分取高名を顕しの宮方を不勢しのひ集り勢ふれど遂ふ敗績し名ある武士多く討死し源三位入道殿御父子も平等院ふて自殺あり宮ハ奈良を志し落ゐひし処光明山にて流矢きゝて御脇坪ふ深く立其侭御落馬ましゝるを秩禅判官景高落合て御首をしるし一五二十余人ゝ絡り乱れど義仲大ふ悲歎あり叔父行家ハ一時の不覚より宮御落命せさせ参らせしひさしも名家の頼政父子宿志を達せず半途ふして命を損せしを安からぬ我別腹の兄六條藏人仲家子息藏人太郎も一定戦死せしなん嗚呼天如何なれど暴悪の平家を扶け滅忠の頼政を禍しに参らせど天ふ怒り地ふ悲み物狂しく見えゐひるを兼遠大ふ剣し君さの歎を参らせ孔明が言ふも人吏を謀て天吏を成しやせり時の熟せざるハ聖人賢者も奈何ともなきし此上ハ高倉宮の御子一方を當國へ下し時を待て平家を亡し御子を帝位ふ即すりまゐ宮の御為七堂伽羅を建て

参ふ勝る御追善さるへしとやふより木曽しの実ものく歎をとゞめ心利しふ者三十余人を擇出し各姿を扮装せ宮ふ縁ある加賀大納言の紆へ上せらる是宮の御子を木曽へ迎へまゐんとの結構なりとや

高倉宮若宮赴六波羅條

扨も都ふハ清盛入道高倉宮を討すり源三位一家を亡し耶心を安んしまゐる此度の結構を決しく法皇の睿慮より出しゐしと推量し去る十一月ふ鳥羽の離宮ふ押籠まゐりし宗盛さゐ歎をやさるふより漸々五月十四日ふ鳥羽殿を出しまゐり八條烏丸の御所へ入まゐらせしふ又々五月廿日ふ再び鳥羽殿へ押こめまゐりぬ人々ハ勅怒猶止ざるや有ん高倉宮の御子達を殺ごとなす出し失ひまゐれしを下知しまゐるを浅猿しまゐるふ抑高倉宮ふハ腹々ふ御子数多まゐりしまゐる今般御謀叛を思召しまゐせひ其すなはちまゐ流矢の為ふ亡させひまゐれど其方ごゝの人々御子達の御歎を聞かくひしまゐふ沖行船の揖をさゝん天

高倉宮の
若宮を
六波羅へ
召捕図

とぶ鳥の翼を抜きたるおもひをなし。さらぬだに心荒き大政入道。何なる憂目をや見んと。御歎の中にも安き心なく。狩場の小鳥の雪吹にさそはるゝ。敢なくも忍び隠させ玉ふもあり。又八千代かけし祈りし緑の御髪をおろし。錦繍の袂を墨染にかへ心にもあらぬ尼入道になさせ玉ふもありて。とりわき哀なる御中にも。殊にいとをしかりしは伊豫守盛章の女三位殿とて。八條院に宮仕してありしが。女房の方へ。宮年久しく忍び通はせ玉ひ。若宮姫宮二方出誕させ玉へり。此三位局は女院建禮門院と幼き頃より御遊びがたきなれば。殊に隔なくむつましくせさせ玉ひけれど。其つまをや姫宮も襁褓の裡より女院の御許に招きとりて生し立まゐらせ御子のごとく寵せさせ玉ひけるに。高倉宮もなく成玉ひぬと聞召し。御おどろき大方ならず。若宮姫宮の御身の上如何なしせ玉ふ事にやと。女院も三位どのも御心地まどひ。只打伏て歎き暮しまひける。然る処平日女院へ親しく參り仕ける。池中納言頼盛。清盛の使として參られければ。日来は心隔なきのいひさらに人ま

見じもとふ六尺ありぬ荒夷のおもひせられ怖しくぞおぼしける。頼盛威儀を正しくて申されけるは此度高倉宮源三位入道が勧にまかせ諸國の源氏に令旨を賜り御謀叛を企させ玉へど。君の為世の為黙止がたく。合戦に及びしが味方利運つよく宮方敗戦し宮も御落命させ玉へり。それに付大相國の勃怒強く宮の御子達を搦て參れとて某をさし越されたり。方々の御愁傷さこそと察しまゐらすれども一度言出せし事再び変ぜぬ入道殿の命なれば奈何ともなしがたし。急ぎ若宮を渡しまゐらせ玉へと相述る。女院も三位どのも兼てかゝる事ありとは思ひ設け玉ひけれど。今更胸ふさぎ塞り魂消る心地しまひ。只何と答へ玉ふべき詞なきに弁へ玉へど。衣の袖を身におしあてゝ許に泣伏玉ひぬ。頼盛もよしなき使に來りかゝる御歎を見る苦しさよと。泪さしぐみて猶豫なるに。随遂せし郎等判官頼盛を勵して申けるは。時刻遅滞せば大相國の御気色猶あしく悪く若君の御為も善からずと。頻りに疾々若宮を請け玉へとせり立る。女院も三位どのも御歎の中に

も。彼判官ハ宮ノ矢ホあらぬ亡ひ玉ひ。其情なく御前さぐ取ちうさる無道者よと深く怨を恨を重ねて潜ホ女房達ホ命じ。若宮を御蔵所ホ深く隠ー忍ぶせ進らせ。扨頼盛ホ向ひ仰る。宮御縁致あらるれぬとはえー暁とう。若君ハ何國行ひ玉ひ。姫ホ乃えぬ玉ひ。かりひとうホ御乳母なぶの心ざしー賺ー出ー影を隠ーなるふこをあらぬ。當館ホハさーホ御行儒ちうとなると誠ーもホ宜しを飛彈ノ判官嘲ーひ。る御紛ホ嬰子をも賺ーれ玉ひ。爾死ひ。此御所ホ〜まさぐるも等閑ホ立阪りく大胡國ホ何と言上仕ぐ。死御爲あーくハそうひハ。由なく偽り成宜ひ出ーまりひ。とせ。女院も三位どのも露いくなーぬひ。判官大ホ氣を焦燥く頼盛ノ紬を引。北上殿中ノ猥を局をまぐも搜ー需ても宮を尋出ーのと勧む。女院御氣色を損ドぬひ。れ景家何とか。若君ハ〜ぬさどとせ。殿中を搜ーても需んーや。是ハ不側ノ中ノ為ノ妻苟も當今ノ母ノ為ホ武士ホ帳内さく

搜ー辱められなど。國母ノ名ぞれホ立ぬ。存命ノ憂世ノ人ホ笑ひをーら。まんより八疾なる人の數ホ入なる。其跡ホ〜ハ如何とも心ホ任ーひ。己ホ守ノ力ホ手をうけ玉ひ。頼盛大ホ周障ノ推止ら。先妻ホ〜命ノ〜せ玉ひ。景家ガ兼忽と。ナさぐ御父入道ノ厳命を重んぐ。ノ〜より起りいなり。若宮ナーさぐといへハ。此上ハ三位殿と姫宮を將ノ六波羅へ參ル。其旨胡國ホ言上ーひ。と利を推ノ〜ナれハ女院も三位どのも理リノ上ハ詮方なく。遠方ホ昏くぞおーる。若宮ハ物蔭より此躰を御覧ー。妻ノ体遁れぐーるおぐーる。今年僅ホ八歳ホ。ら。せ玉ひ。我ホ〜ホ母上姉宮ホ憂目ノ世をナ〜ノ〜を不孝なり。後の世の罪もぞ恐ーと睿ホ泣ぐーとり。帳内より突然と歩を出玉ひ。頼盛ノ前ホ座ーく宜く。九ホ〜ホ御所を騒ーー女院母上姫宮ホナく憂をノ世せるを道なるぞ疾く。九を胡國ノ行引行よと紛ぐーく仰る。れぐ。女院を始ノ〜せ三位殿。姫宮。女房達老ぬるも若ぬも色を変く泣沈ぐね。頼盛も流石岩木なるねぐ水干ノ

袖を涙に漫し曰く、父宮の御謀叛に伴ひ
まるるも、爭うあらん計らひなるべき心強く思召しまゐらせの御用意い
へと勸めまるるぞ。母君は注々御化粧まゐらせ、御髪をいとく御顏をつきくと
おさまりぬ。斯むりらふく生立ちまゐらせ者を、爭う独恐ろしき六波羅へ渡しまゐらす
べき妃も俱に持て行まゐらと、抱き付て泣入まゐらせ。若宮もいと悲しく泣さまゐる
ひなびろまぐ、ぢやう歎きまゐらせまゐらせも其甲斐なくて、母君は姉宮をひろ
傳きまゐらと宣まゐらせ。人々弥泣ぞ惑れける。彼弾判官声を厲し、時延ひくは弥
御為あしかるべし。早々とせよ立れ給へ。母公力なく御衣着くさせ直垂着な
りくとり繕ひ進ぜまゐらせも、只夢の中ぞ心荒れ大政入道いかなる
計らひなんと心もとなく、多ね御涙ぞ流れける。頼盛朝臣頭を若宮を御車
に抱き入奉り押出させ給へば、女院も三位殿のもとへ亡れまゐらせ御心地し、其後
臥沈て泣入まゐらせ。是に付ても女院の御心は宿世いかなる契り在てか、世宮と離

線の内に生れ立給へる憂きを見るにつけても、疾より斯と思ひ設けしかど
見まゐらせなるべきとぞ思ひ寄給へる。悔み歎き増さる母君は前後を弁
へまゐらせず。年来手習物学びまゐらせる人々も勝れ幼き御心ゆゑ御孝行さく
深く御在ぜまゐらせ、心に誓ひ給へるものを。人手に奪れ進らせる前の世
如何なる悪き報ひの廻りきたるにやと、法皇の昔の御座ぜいらるゝ
ゆゑ歎き給へ。御身に憂を見せまゐらせ、紙屋川に大政入道が為に押籠られまゐらせ
其ゆゑも叶はぬ世の中の童なれば、何ぞを弁へぬ母の側を放れまゐらせ
泣むつかるべきぞや。姉宮に憂を見せまゐらせるぞ悲しき。名称出まゐらせ健気
なる物おぼえなれば昔に変らず先立のひ給へる父宮に見せまゐらせ、いかゞ
まゐらんと、あるべき口説き、声を出して高き賤しき
子を抱き入て、闇に迷ひ親心よりその見るやうもいと切なく心なき婢女仕丁まで涙に
袖をぞ絞りける。是は叔父頼盛景家は若宮を守まゐらせ六波羅へ赴く。車より

出しまゐらせ大将宗盛に渡しぬ。若宮は流石幼き御身なれど心細き言ひ方なり。
御衣の袖を身に推あてゝさめざめと泣き給へば宗盛も哀を催し給へり。
かゝる所へ頓て若宮を伴ひ一間所に居おき進ぜ大政入道ふくと達
しなれど浄海の道宗盛に對ひて曰吾見まゐらせ高倉宮に對し聊も難面なき
らざるに却て吾を恐る由そは大臣を始め亡ぼす上
兼て我所存に彼宮を土佐へ流しまゐらんと世に情なくトを宗盛何と返を刻もなくとゝ待に
若宮を土佐へ流しまゐらんと世に情なくトを宗盛何と返を刻もなくとゝ待に
さし兜首なり。池大納言頼盛進出て申さるは御旋も聖代の政を其罪
を妻努に及ぶまじと申せり。高倉宮の御縁坂も假令頼政又子ら勧めまゐらす
義なく其張本人の源三位又子戦死し宮も御落命有し上は幼年の若宮と其
侍さしおきあるも何条すべき殊に此若宮は建礼門院の御寵愛深く幼
なより御手ばなし生し立まゐらんと申せし間も御歎の色

深く宮中に深く隠し進ぜ左右仰く出しまゐらせ給方はなく判官景家殿中
を捜し雷とやせ申ぬ。後右も左もせよ〳〵已に守刀を
をうけ取ひし式漸を留めまゐらせ若宮の御ず悪く紂らひ給ハドと申賺しまゐらせ
申是まぐ倶しまゐらせられで女院の御命ゆるく貯ひまゐらせまゐすのを。
遠く土佐へ流しまゐらせ女院の御歎は深く方一の御ずなしに悔くなりにけり。
只願くは御憤り給宥められ都近き寺院へ入進ぜ御出家させまゐらせ女院の
御歎なも薄らぎ其方ざまの人なも御仁心を仰ぎ給へと言を尽しくを
諫めまゐらせ道敢く伏せ給へとくも鐘愛第一の女院の命に背くまく貯ひ
ふとなさしも豺狼の心も思愛の情ぶかく此宮御室へ送りまゐらせ出
家に成まゐらせ第四の宮を召捕て土佐へ流しまゐらせ急ぎ洛中洛外を堅守し四宮
を捕まゐらせきれよと厳しく命じ給へば頼盛も入道が悲深き心情
眼前此宮を救ひ式悦び畏く領掌し即時に若宮を仁和寺の守覚法親

王の御紆へ〻〻まり。女院の方へも斯と申達し給へば。女院も三位どのも女人
胸を安んじ給ひ頼盛の行らひを悦ひ給へり。此仁王寺の法親王八後白河院
の皇子ゆゑ。若宮と八叔姪の御中なれど。殊ゆ懇ゆ労り〻せ給ひ。御膝下ゆ
て生し立後出家得道させ給ひ。御名を道尊と呼。天晴天下の碩徳ゆ成
給へんと末頼母〻しかべし〻ゆ。其甲斐ゆ〻十八歳ゆて逝去ゆひしゆえ。法
親王深く惜み歎き給ひしとぞ

西宮北國御下向條

茲ゆ大〻殿富門院の御所ゆ〻むらへ沿部卿の局と申女房も。高倉宮ゆ
狎さひまり。若宮一所をもうけ奉り。若宮の中ゆて四男ゆあ〻せ給へば四宮とぞ
世の人申奉る。是も宮御落命の汝汰を聞て。手の舞足の踏を忘れ。何國ゆ隠
し奉んと騒ぎ惑ひ給へ。爲ゆ故高倉宮の御乳人ゆ嶺岐前司重秀と云
者あり。〻〻源三位頼政と八莫逆の友なり。頼政三井寺の御陣へ馳参り

んと せし砌。潛ゆ重秀を招き〻〻ゆ八此度宮の思召を〻〻だ露顕せし上
も千ゆ一つも御利運有ま〻じ〻〻宮方敗軍と定だ。守時も早く若宮の御
供し。信濃なるゆ木曽義仲へ紆ゆ〻り。御身の上を頼られへと。呉々も含しゆ。
重秀是を承引し。俄と宮の御くもせど。世の動静を窺へゆ果し〻味方兄
道の一戦ゆ敗績し。剃へ宮ゆも御落命在しと。大のゆ驚ゆ無念の涙ゆ流し。
追腰し〻殉死せでやと思へども。頼政の遺言八茲なりと思ひ返し。句と蜜意
を示し合せ若宮を負進ら〻せ。夜ゆ紛れ〻〻御所を忍ひ出ら〻ゆ。何國ゆ忍
ばせ給へんと思惟し給ゆ。指尚り〻〻是と申方もなれば故宮の縁り
ゆまま。加ゆ大納言の紆ゆ行ゆ云の旨を告ら〻。女時ゆ若宮の御身を隠ら〻せ給へと申
ゆ大納言も重秀が誠忠を感じ給へ〻せ〻も平家方の警守厳しゆれば我方ゆ
貯隠へも万全の謀なるべし。叡山の頭真阿闍梨を大納言の行の師なれば是が
方ゆ暫時御身を隠し。其後北國へ落し進ら〻せんゆハ不如〻〻。大納言の消息

讃岐
前司
高倉の四宮
伴さく山門へ
赴く図

賜ふ。又君を負ひ山門に登り。阿闍梨に謁し。
大納言の消息を呈し。若宮の御使を頼み奏ぜば。阿闍梨一議に及ばず承
引おり。若宮を坊中に貯ひまゐらせ。悃に御抱ヘまゐらば。重秀大いに悦び。其身は姿
を扮装し。洛中へ出で。街の風説を聞に六波羅の命令厳密の宮の御行儲を。
草を別て穿鑿なるべす。厳しく。近國遠國すべも配府を回すべしなれば。重
秀深く恐れ。いよいよ若宮を阿闍梨の許に深く隠し。なりゆく程に木曾殿の
間者都へ著しく。加賀大納言の許に到る。義仲の蜜意を言上しなれば。大納言は
渡りに船を得し心地して。即ち睿山顕真阿闍梨の許へ四
宮忍び入りを告げ。心の御随身を副へ。木曾の間者を山門へ登し。あの間者
顕真阿闍梨の坊に入り。義仲の蜜意を加賀大納言の御意を達しなれば
阿闍梨雀躍く悦び。重秀に示し合せ宮を田舎乙女の躰に扮装ます。
重秀も田舎道者の躰に装く。木曾の間者と倶に夜中に忍び出
で山門を忍び出

東坂本に下り北國へと落ち給ふ。道中無なく八月十四日に若宮木曾に御著
ぬ。木曾この大いに悦び。是より北陸宮と傳たり。重く尊敬奉れば加賀
大納言の縁に付て加賀能登越前の國人に内々木曾殿の旗下に属し若
宮の御為に軍忠を励むべきの誓書を認め。人質を差越者絶間なく。木
曾殿の勢ひ弥強大になりゆく。猶も時節を見合萬事隠密に執行
はれ給まゐ。六波羅に木曾殿の結構を聞くに

大夫房覚明属義仲條

都に清盛入道高倉宮一味の輩を尋ね出し。悉く誅を加へ給ふ。第四の宮
の行方なれば。大いに心を焦燥し。諸方を尋捜させれども更に分明
なるべきを得ず。其後に置ては。此度宮に加膳せし三井寺幷び
南都の奥福寺東大寺の大衆を深く悪し。如何もして此恐を報ぜんと謀ひ
給ふ。其中にも南都より三井寺へ及牒の文中に清盛者平氏糟糠武家塵

芝と書しるすを深く憤り其筆者を探ること原ハ藏人道廣と云武士なり。
小納言信西が門人なりしが天性智才遲しく和漢の書籍に通じ博学剛記
の者なれど信西が執達なく勧学院の紀文章稿を頒りしに後出家して南
都興福寺に住し法相華厳を学ひ最上房信救と名称一山の文者なりと
雖ども即ち検非違使判官兼任として武士に命じ急ぎ南都に発向ひ
悪僧信救を虜にせんとす我面前にて渠が毫持ちし腕を引抜梟にせ
んと敦圀あり下知をるゆゑ兼任承り手の者五十余人を引具し直に
南都に発向ひ興福寺の寺中にいたり長吏を呼出しくわ多ハ當寺中の
最上房信救と云僧やある渠三井寺の反逆を書し前代政入道どのを
悪さるに書しる糸上聞に達し急ぎ召捕きれよとの厳命なり疾々搦
捕て差出すべしと擬柄押に命じ長吏大いに驚き申さくハ仰のごとく
信救と申僧房中に見あり去ながら渠元来剛気の者にて我慢剛気の者に

寺中の者の命に順ひいなゞ何卒直々に召捕て既りなんとのゝ仰ゆゑ兼任さら
ばとて長吏を案内者にして信救が房へと向ひ給ふ是より先に長吏を
潛に信救が方へ人を走せ今都六波羅より汝を召捕に向へり疾く遁電
せよと言はせしかゞ定めて逃延て空房なりしと知り信救が房近く
なるに及ぶに兼任に向ひおれこそ御尋の最上房が住所なれ踏込ぐべう
なりと教へ其身ハ我房へ逃入りぬ扨に彼信救ハ原武士にて武術に達し力
三十人に敵する剛の者なれバ今僧形となれども猶勇力撓まず六波羅の征
兵に向ひ長吏が許より告越落よとハ教へれども天子を困め万民を脅と
清盛が家人悪さも悪し一中あて同に物ハせ其後立退んと同宿の法師六
人と倶に鎧一縮に得物を携へ相待しに斯とハ思ふと判官兼任何の用意も
なく士卒に房門推開せ立入るに正面に鎧して法師武者七人得物を
携へ弓弦引けて立ハ大いに驚き怪しみ億せんと大音に呼はり六波

羅どの〻命を請最上房ゝ御尋の条あつ〻判官兼任向〻ゝるゝゝ汝ゝ有無の
議をもちゝず狼藉せゞ助るゞ死命も助るゝゝ死ゞ速ゝ六波羅〻条上一
科ゝ有無を陳謝せよと呼れゞ信救呵ゝと嗤ひ我ゝを清盛を平氏ゝ讒
臻武家ゝ塵芥と書一信救よ汝言を餌〻〻我を釣んとゝゝも何ゞ信
どゞ死法王を押篭天子ゝ御位を下一する逆臣の録を喰汝ゝ佛罰ゝ程
おそひまれよとゝ早〻各亭ゝ上けゝるゝ弓箭を差取弯絃散々ゝ射るゝ是
ゞ為ゝ判官ゞ手ゝ者十五六人矢庭ゝ射仆され残ゝ堂も周障猛ゞ〻門外へうつ
と引兼任大ゝ怒り悪ゞ渡法師の腕立ゝ〻〻残ゝ士卒ゝ下知をけゝ〻敵
ゝ近ゞを信救を物ゝもせゞ箭種尽一ゞ弓箭投捨長刀柄長く取仲ゝ群ゝ
敵中ゝ割ゝ〻前後左右ゝ切伏〻〻秘術を尽一〻働けゞ日宿の僧も我劣
一と得物を手振追つ返一ゝ戦ひゝり兼任も茲を大変と走り廻つ〻下知を
傳へ自身太刀を抜振一て日宿二人を切〻捨猶も厳一〻様立れゞ信救ゝ与力の

法師六人〻も遂ゝ日一枕ゝ討ゝ〻ゝ兼任ゞ手ゝ者も三十人ばかりゝ討なれ。
丈ゝ薄手重手負ゝ物の用ゝ立ゞ〻ゝ〻ゝ兼任と信救とハ俱ゝ一ゝ
所ゝ手をも負ざれゞ互ゝ向ひ合せ一往一来一ゝ右ゝ手ゞ左ゝ拂ひ左ゝ切ゞ右ゝ
結〻鋒ゝ火花を散一戦ひ〻〻ゝ終ゝ兼任敵の長刀を結損ゞ。綿髪ゝ
咽喉ゝ切込ゝ痛む処を信救得ゝと飛ゝ水も溜ゝゞ兼任ゞ首を討落
一〻ゝ此勢ひゝ辟易一残ゝ者一も〻ゝ足もなく八方へ逃散ぬ信救其侭鎧脱ゝて
真福寺を落ゝ跡を晴ゝ〻〻ゝ都眷山ゝ知音ゝ僧永雲と云ゝ者在れゞ其
ゞ方へ身を寄んと眷山ゝ西塔へ尋行云云のあるむを聞ゝ永雲も信救ゝ武勇
贈略を賞美一和僧を南山ゝ留人ゝゝ六波羅ゝ使を討ゝ者を舎
藏置人も後日ゝ咎ゝ量ゞ一。但一我法友ゝ顕真御坊ハ北國ゝ木曽殿ゝ由緒有
ゞ彼人ゝ消息を受ゝ信列へ下ル。木曽殿ゝ身を寄ゝゞ万全ゝ活計ゝ
と勧ゝゝ信救大ゝ悦ひ左も右も〻〻ゝ永雲心得即時

大夫坊覚明
いまぐ信救と
名乗り対
平家の
紂人判官
兼任を
討て南都
を落る図

に頭真阿闍梨が許に行信救がもとを訪り書翰を渡すに阿闍梨快く承引有て
木曽どのへ頼みの帖をもつて永雲に賜ふ。永雲深く謝しつゝ立皈り信救に阿闍
梨の消息をおくるにぞ信救尊く礼謝し行脚の僧の躰となり遂に叡山
を立出信州におもむきて木曽にいたりつゝ阿闍梨の消息を呈しければ木曽どの
深く悦びたまひ我久しく和僧の博学多才なる我史一度相見せんことを願しに豈
はからん躬ずから来られんとハ向後ハ我此木曽に停りて平家追討の力をたすけ
られよへと他事なくもてなされければ信救も大いに悦び是より木曽殿に随従し
ければ平家への憤を晴さん名を大夫房覚明と改め昼夜木曽どのゝ傍に侍
座して軍事と平家追討の謀をぞ示し合しける

諸國源氏蜂起之條

去程に太政入道清盛ハ我を悪口せし信救を捕へ仇を報ぜんとおもひしに其ころ
ならで信救却て判官兼仲を頼て逐電せしと聞て躍り上つて大いに怒り是
皆奈良法師どもが当家を怪んじ方に計ひ悪僧信救を落せしなるぞ惣じて
今般三井寺の衆徒奈良の大衆に高倉宮の謀叛に与力し。当家を亡さんと
せし条言語道断の曲事なれバ後来の見懲しに三井寺をも東大寺をも焼
亡し怨を報ぜんと心に巧みたるが又おもふやう。高倉宮已に諸國の源氏に令旨
を出しされバ何時凶徒都を襲ひ法皇新院を虜にせんもはかりがたし所詮
摂州福原へ遷都して其患を避んにハ不如と俄に主上上皇一院其外百司百
官に此議を触らし治承四年六月三日を都出の日とぞ定めたる。君をはじめ奉
り月卿雲客大いにおどろき是ハ如何桓武天皇此京を草創し給ひしより萬代
不易の都と定めおかせしを人臣の身として遷都をなされ如何あらんと議論
區々なれども誰有て入道を諫伏る人なく是非なく其心構しなるに入道如何思
ひけん兼て六月三日と定めたるを一日引あげ六月二日都出と触渡しければ供奉の
上下周章狼狽て取物も取あへず主上上皇一院の宝輦を守護し年月住なれし

花の都を後にかなしく撰列福原にくだり下りたる。実に是ぞ行跡さまに人間の所業にあらざる。偏に讃岐院の御霊の為業しかるべき。斯て六月三日福原に御著有られぬ。即ち池中納言頼盛の別業を皇居と定め。上皇清盛入道の別荘法皇八平宰相教盛の別荘に宰の御所をさだめ。押籠まいらせ。其さまひくに罪囚のごとくなれば。見まいらせ人々涙を流さぬなし。法皇も今八逆鬱に堪ずして。潛に文覚上人を召て。伊豆の頼朝へ急ぎ平家を追討せよとの院宣を賜りぬ。されども平家の宿運既に尽ぬる兆にや。かゝる事共夢にもしらで。六月九日より新都造営の事始をし。和田の松原より西の野を傳ひて。九重の地を割ふ所扁狹にして一条より五条までなれば。其下なれば。道浄海諸家門を集て評議とする。或八播磨の印南野を用て其数を足んとし。或八摂列昆陽の野を裂て足らしめんとも。更に一決せざる。其年九月二日摂津國の住人大庭三郎景親が許より。早馬到著して。蛭が小島の流人前兵衛佐頼朝

謀叛の旗を上げ。枚刑官兼隆を討取。石橋山に勢を集めと大息吐て。任進して。平家の一門大いに驚き怒る。又を同三日紀伊路より急使きたり。熊野の別當湛増謀叛のよし。次告同廿日に西國より飛馬をもつて筑紫の菊地謀叛の由を告。十月十七日に八美濃の源氏蜂起の由。早馬きたり。廿一日に近江の源氏謀叛のよし注進。其外国々より謀叛の注進数浪の如く引も切ざれば。清盛入道の緒人色を失ひ。周障を支。大方なら八如何さまに八平安城を福原へ遷されし。崇なりとも暴悪無道の入道の心魂なれば。さまで還都を催さんと。俄に言出し。十二月二日又々主上法皇一院を守護して旧都へ還御なりぬ。城に其費幾萬金か量られず。疎略なり。斯て人々都に還りぬれども。内裏も壊ち抵梟の柵となり。百官百司の居宅も荒果て。露霜を防ぐ所もなれば。主上六五條の内裏を假の皇居とし。法皇一院八六波羅へ入まる。月卿雲客八西山東山の寺社に身を寄て。

其日を過し一日一夜とりあつかりあり。道浄海心中ゆ申ひ給ふ。今諸方の凶業蜂起せるゆ上ハ門の安危此時ゆあり。不如一院法皇の御意を宥めまゐり。源氏ゆ御心を引されゆ申ゆ対ゆハ。さもあらぬ子孫長久の方便も成難し。遠くも心付。還都の後ハ両院をもゆ困めまゐらせ。讃岐美濃二ケ國を両院の御分國ゆ寄なり。天下の政務を御意の侭ゆなし給へと奏し給へ。法皇ハ可安ゆ申ゆ召さるゆ御耳へ申入給ひ。只且夕ゆ源軍早く攻上りて此老賊の首を刎ねと思召昼夜源氏の上洛を待せ給へ。御意の内実理りなれ覚へる。

摧頭兼遠上京之條

去程ゆ平家を先東國の凶徒兵傍佐頼朝を制せんと。右近衛少将維盛薩摩守忠度三河守知度侍大将ゆ上総守忠清斉藤別當実盛五萬余騎の猛軍を率て都を出て富士川の西岸ゆ着て陣を張ゆ。此時兵傍佐頼朝ハ関八州の軍勢隨ひ靡く凡十余萬騎。富士川の東岸ゆ陣を張。其さま野ゆ充山ゆ満て互雑の地をも残さず駭き騒ぎ。平家も敵見程ゆ大軍なりしハ驚き怪ぬる。大ゆ恐怖し給ふ。川を隔て睨ひ徒ゆ対陣し給ふゆ或夜源軍の中ゆ凶利なる者あり。富士の沼ゆ集る処の水鳥を驚かし給へ。驚万の水鳥一度ゆ騒ぎ立て西へ飛渡る。其羽音はゆ大軍の川を渡るごとく聞へ。億病神の魅る平軍。須臾敵軍夜討ゆ寄るべと言出し物の実否も見定ず我先ゆと崩て都をさして逃上る。大将維盛忠度知度忠清実盛ゆ是を制すれども。大軍の引さるかと耳ゆも止ず蜘の子を散らす如く逃上るゆ已事を欠ぐ。俱ゆ都へぞ引返し給ふ。是ゆ依て都ゆ在処の平族大ゆ騒き立て斯くて凶徒忽ゆ誅伐なり難し。奈何せんと軍議區々なる処。又ゆ北國より早馬京着して曰木曽住人中三摧頭兼遠義先年より帯刀先生義賢が子を頼ひ給ふ。當時木曽冠者義仲と名称せ給ふゆ軍戦の用意とゆ謀叛の結構を成り給ふゆ。構へて御油断なく注進し給ふ。平家ゆ大ゆ驚

況今東國の敵徒強大ふしく制しがたく北國ふも逆徒蜂起せゞ由々しく大事なり。急ぎ兼遠を召上しく子細を推問し。弥謀叛治定なくゝいまゞ勢の酎ざる間ふ征伐を命しく。急使をもつて兼遠を六波羅へ召上しく。其使者ふ曾ふ著しく平家の命令を述べむ。木曾殿女しも騒ぎ玉ひゞ。味方已ふ義兵を起さんと脇を固し上ハ何の畏り有べく。速ふ其使者を切く軍神を祭り。即時ふ発上しく隣國の敵を攻滅んとやされるを。兼遠大ふ制し。多くもゞ短慮の行迹ふ去ひそいまゞ味方人心定らゞ合戦の用意も十分ふ備らゞ。今事を荒立ひしく。間近く越後國の住人城太郎助永ハ平家無二の味方ふ。然も大身なれゞ國中の勢を驅集ても五六萬ハ有し。其猛勢を以て短兵急ふ攻きたり給ゞ。味方防戦叶ひ難し。然てゞ今使者を斬る良策ふあらゞ。只某招れふ應し上京しく。兵吾ふ任せ陳謝し時日を延ん。其間に君ハ和し仇ふ合戦の用意をなし給ふ。義仲頭を左右ふ揮ひ否々

足下上京あらゞ。平家必ゞ人質しく都ふ留め置ん。然あらゞハ味方七分の弱とあり。此議ハ決しく無用なるゞしと承引ひ給ゞ。兼平兼光其外の勇士も此度の上京然るべきもの多ん。兼遠ハ推返しくやうハ。君某が艱難しく小息を於やしく左程ハ難有ゆゞ。然ても人事今平家ハ日本過半ハ領しく。門皆三公九卿ふ列し。天子を孫ふ持ちく威を四夷ハ荒ふ暉せり。然るを味方孤力ふ寄合勢をもつて伐平ゞんとなるゞ。故を衝ぎ東海を埋んともする鳥ふ比しく。只君の為世の為。義を泰山ふ比し。命を毫毛より軽んゞ。猶る平家を伐んとなるハ是武王の殷を伐高祖の秦と攻ふ同しく。況大義なり。固程の大望を思立なく。老ゞ物の要ふ立ん。兼遠一人を敵の為ふ人質ふ渡しなゞ味方の弱きなりと仰るハ言甲斐なし。古人も小恥を忍びざるゞ大謀を乱るとやせり。数なしね老丈ゞ一命をゞひ。敵ふ先ぜしれ多年の大望半途ふ空しくなんゞ。君ハ對しくハ不忠の臣となり

先祖對〻を不孝の子となり末代の青史に辱を殘し〻と理を歎て練り爭へれば木曾殿の諸男士も其拾言に屈伏し口を閉ざぞ居ける

木曾義仲勲功圖會前編卷之四畢